

<新収資料紹介・翻刻> 山田美妙 大槻文彦宛書簡

真島 めぐみ（特別資料室）

山田美妙（やまだ・びみょう、1868－1910、本名・武太郎）は、明治時代の作家、評論家である。彼の文筆活動は、明治18（1885）年に尾崎紅葉等と文学結社硯友社を結成し、その機関誌『我楽多文庫』の編集に携わった頃に始まる。以降、小説や詩、評論と次々に作品を発表し、一躍文名を高めた。とりわけ、明治の文学を考える上で重要な“言文一致運動”の中で、その理論の追及と実践をきわめて早い時期に行ったことが功績として知られている。また創作以外にも、辞書類や作文範例集の編纂に携わるなど、めまぐるしく変化する明治時代の日本語の探求に努め、生涯言葉や文字と闘い続け

た人物である。

当館では本間久雄文庫（文庫14）を始め、多くの山田美妙の関係資料を所蔵しているが、このたび新たな直筆資料を収蔵することとなったので、ここに資料の翻刻と簡単な紹介を行いたい。なお、資料の内容については稿を改め考察を加えたい。

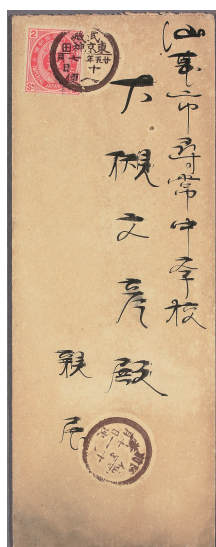
<新収資料>

山田美妙書簡 大槻文彦宛（ヌ06－9353）

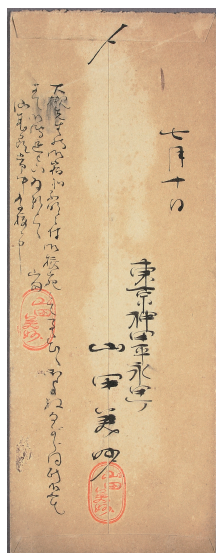
1892（明治25）年7月10日

封書 用箋2枚 墨書

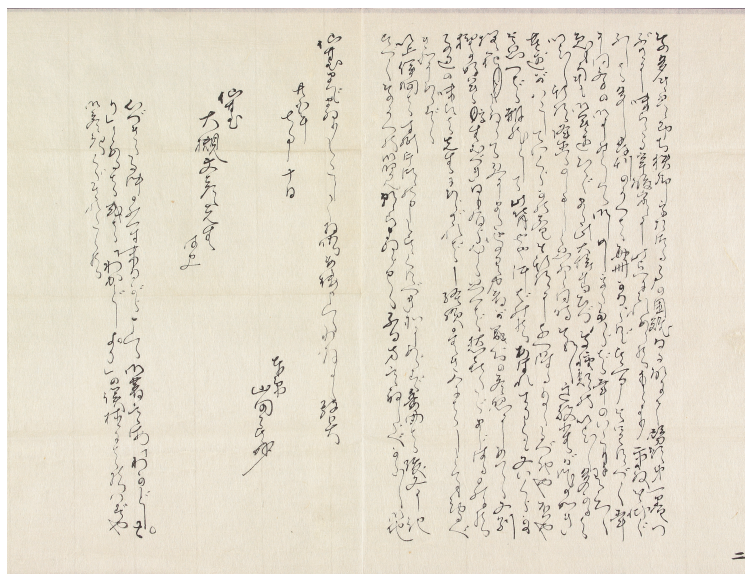
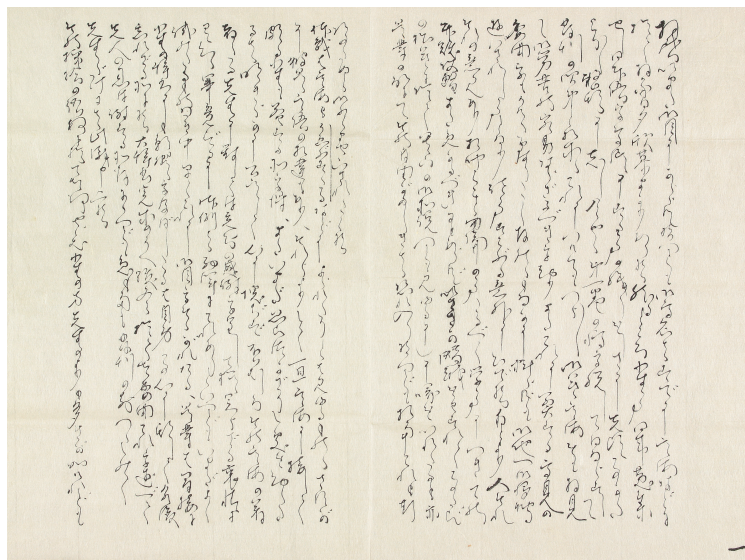
<封筒 表>



<封筒 裏>



<書簡本文>



翻刻にあたっては、次の要領にしたがった。

旧漢字は新字体に改めた。仮名遣い、送り仮名、仮名の清濁、書簡本文の改行は原文のままとした。原文に句読点があるものはそのまま生かし、その他適宜通読の便を配慮し一字空けた。おどり字「く」は「／＼」を用いた。判読しがたい場合は□とした。□内に番号を付し本文の後に簡略な翻刻者注を設けた。

【翻刻】

〈封筒 表〉

仙台市尋常中学校 大槻文彦殿 親展

〈封筒 裏〉

七月十日 東京神田平永町 山田美妙 「山田美妙」(朱印)
大槻先生の御宿所不明ニ付御校宛ニて差出候 御手数ながら同氏御宅まで御伝達被下度願上候 山田 「山田美妙」(朱印) 仙台尋常中学校御中

〈消印〉二種 「武蔵 東京神田廿五年七月十日へ便」「陸前仙台七月十一□便〔注①〕」

〈本文〉

拝啓 いまた御目にかゝらず候へとも御高名はすでに言海〔注②〕などに於て拝承 日夕欣慕まかりあり候 然るところ小生事 日来蒐集せし日本語をその俣にする事の残りをしさに先頃このかたよう／＼整頓に志し今や、第一巻の稿〔注③〕を脱して日ならずして発刊の次第と相成候 これにつけてもつら／＼御著言海をも拝見し御労苦の容易ならざるべきを知り またこれに関する高見の委曲をも うけたまはりたく存居候もなかに料らずも御地へ御移転遊ばされし事となり〔注④〕候事すこぶる意外に出で候 もとより人それぞれの意見あり 相聞くこと勿論の事なるべく学事につきての弁難攻撃また免かるべきにもあらず いささか僭越をわすれてこのたびの拙著に於て貴下の御所説（とも見ゆるに）に喙をいれたる〔注⑤〕も亦是業の故にてその自由がましきは恐れ入り候へども折角これも斯道のためと御ふくませ下されたく候

体裁は言海もうゑぶすたる〔注⑥〕などによられたりとは見ゆるものゝさすがに彼は言語の相違もあり、それらよりして一旦言海に接して頗る小生も益する所を得、またいまだ思ひつかざりし処を知りたるは明きらかに公言して心に愧ぢず 否むしろその言海の著者たる先生に対しては充分の感謝を呈して猶足らざる衷情に有之候 畢竟ずるに体例

〔注⑦〕は初聞にこれありといへどもいまだよく試みたるものなき中 早々これに御目をそゝがれたる、是業は間接に小生の辞書にも影響を及ぼしたるは自身この心に期して爾後忘れざる所に候 大辞書完成のうへ跋文に於ては委曲これを述べて先人の恩は謝する所存に候へども 兎も角も発刊の前つゝしみて先生だけには此議申上候

その採拾の語数に於て如何やらむ 小生の方先生のよりも多きが如けれどもその多きは即ち秩序をたつる事の困難なる故にて劈頭第一巻つぶさに味ひたる辛酸実に此点にこれあり候 もとより示教を仰ぐふしは多し 発刊のうへは毎冊かならず其一部を呈すべく幸に同学の御よしみとして御しめしをたまはらば幸のいたりに有之候 兎も角も御著述出でまた此大辞書出づ、その種類のいよ／＼多かるはいよ／＼斯道隆盛のしるしと思ふと同時に そも／＼這般小生が作の如き著述がはたしていくらかの益を斯道に与へ得るものたるべきや否やを思へば赧然として此背やや汗ばみ候 あはれさりととも又いくらかの模範となりて更にまた他の有力者が幾分の参照にあてゝ又別種の好著を生むべき日も有らむと思へば愁喜たゞまじはるのみに候 この辺の味ひは先生にあらざれば——経験の無き人には——とても知るべき所にあらず候 以上詳細は寸紙片語の申し尽くすべき所にあらず 委細は跋文に記すべくそのうへの御覧願ひまゐらせ候 不日方言取しらべかた／＼御地仙台までまゐりしたしく拝晤 委纏申上候所存に候 敬具

廿五年 七月十日

東京 山田美妙

仙台 大槻文彦先生 侍史

心づきたる件のみ一寸末ながら申上候 御著言海「わかどしとり」とあるは或は「わかどしより」の誤植には候はずや 御参考くだされたく候〔注⑧〕

〔翻刻者注〕

- ① □便…「イ便」か。
- ② 言海…大槻文彦が文部省の命により編纂した国語辞典『日本辞書 言海』（4分冊、明治22—24）。
- ③ 第一巻の稿…山田美妙編『日本大辞書』12分冊（日本大辞書発行所、明治25—26）のうち第1巻（明治25年7月発行）を指す。
- ④ 御地へ御移転遊ばされ…大槻文彦は、『言海』編纂の命を受けた明治8年より東京の文部省報告課勤務となっていたが、『言海』刊行後の明治25年3月一関に転籍し、5月には宮城尋常師範学校内の書籍館館長に就任している。
- ⑤ 拙著に於て貴下の御所説に喙をいれたる…『日本大辞書』第1巻、特に巻頭「日本辞書編纂法私見」における『言海』への言及、批判のことか。
- ⑥ うゑぶすたる…アメリカの辞書編纂家ノア・ウェブスター（Noah Webster, 1758–1843）。大槻文彦は『言海』編纂時にウェブスターの英語辞書（原題“An American Dictionary of the English Language”初版は1828年刊）を参考にしていた。
- ⑦ 体例…文彦が『言海』巻頭の「本書編纂ノ大意」の中で、「普通辞書の体例」という言葉を使用しており、これを指すか。一般的には「物事の全般とその細則」「文章の形式、詩文の体裁」（『日本国語大辞典』）。ここでは「辞書の一定の様式」の意か。
- ⑧ 「わかどしとり」…実際に『言海』の「若年寄」の項には「わかどしとり」とある。

本書簡は、美妙が初めて編纂した辞書『日本大辞書』に関連する資料である。

書簡の相手である大槻文彦（1847—1928）は、仙台藩の漢学者・大槻盤溪の三男で、国語学者である。文彦が編纂した『言海』は、近代的国語辞典の祖とも評される画期的な辞書で、刊行当時には人々に歓迎され、多くの学者、文学者等にも衝撃を与えた。それ以降、『言海』に刺激され、影響を受けた国語辞典が数多く出版されることになるのだが、その中でいち早く辞書作りに挑んだのが美妙であり、『言海』に続く国語辞典として刊行されたのが『日本大辞書』であった。

この様に『言海』刊行直後に編纂されたこと、また辞書の中に『言海』の名前が幾度も登場し、批評を下している

ことから、『日本大辞書』は『言海』の影響下に編纂され、競争心、批判の上に成り立ったものと考えられてきた。そのため従来の研究では『言海』との比較に焦点を当てた論考が散見されるが、美妙と文彦の間柄についてはこれまで言及されてこなかった。本書簡は、その点を補い新たな側面を知り得る貴重な資料といえる。

一見謙虚な文面の中に垣間見える強気な態度や、まわりくどい言い回し、末尾に文彦の些細な誤植を指摘するところ、特徴的な文字など、この書簡には美妙らしさがよく表れていて、大変興味深い。ここでは詳しく紹介することができなかったが、今後は文彦から美妙に宛てた書簡や同時代の周辺資料等を併せ調査することで、美妙と文彦との関わりやそれぞれの辞書への思い、そしてこの書簡の意味を探っていきたいと思う。

近年、『山田美妙集』（臨川書店、2012～）が刊行されるなど、改めて山田美妙に対する評価が見直されている。本資料を含む当館に収蔵される美妙関係資料も、こうした研究に一層広く活用されていくことを願いたい。

最後に、本資料を翻刻するにあたり、ご指導、ご協力くださった皆様に感謝申し上げます。

〈主要参考文献〉

- ・塩田良平『山田美妙研究』人文書院、1938・5
- ・山田忠雄『近代国語辞書の歩み』三省堂、1981・7
- ・永島大典『ウェブスター』と『言海』（『国語学64集』武蔵野書院、1996）
- ・日本近代文学館『文学者の手紙 1』博文館新社、2008・3
- ・宗像和重「古葛籠の中の美妙—早稲田大学図書館本間久雄文庫の資料をめぐる—」、中川成美「立命館大学所蔵 山田美妙関係資料について」、十川信介「塩田良平文庫蔵 美妙関係書簡をめぐる」（『日本近代文学館年誌 4』2008）
- ・『草創期のメディアに生きて 山田美妙没後 100 年展図録』日本近代文学館、2010
- ・宗像和重『『日本語学者』山田美妙—宿病としての辞書編纂』（『文学』2011）
- ・『山田美妙集 第9巻』臨川書店、2014・5
- ・今野真二『『言海』を読む』KADOKAWA、2014・6